
明日、私はココにいる

小出 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日、私はココにいる

【ΖΖコード】

ΖΖ895F

【作者名】

小出 あかり

【あらすじ】

これまで姉の路子と同居していた日南子は、突然の姉の結婚を機に、引越しを迫られる。そんな人生の転機に直面した日南子が選んだ道は・・・。

3月初旬のことだった。この日、乾 日南子は東京駅にいた。

日南子が、田舎に帰ることになつたと友人である園子に打ち明けられたのは、ほんの一週間前のことだった。父親が倒れて、実家の稼業を継ぐという園子。今日はその園子が、東京から新幹線で田舎へ帰る日だ。

「仕事中なのに、ムリに呼び出してごめんね」と園子。

日南子は笑つて言つた。

「大丈夫だよ。私の仕事は調整がきくから」

2人は新幹線乗り場を指していた。日南子の肩には、園子から預かつた荷物。かさばるカバンを抱えて、日南子は階段を登つた。

「それにしても、心配だなア。日南子一人を置いていくのは」

階段を登りながら、園子は日南子に言つた。

「一人暮らしをはじめたら、『ほんもちゃん』と自分で作つて食べるのよ。お姉さんがいた頃とは違つんだからね」

日南子が笑つた。

「大袈裟だよ。子供じゃないんだから」

それを聞いて園子は言つた。

「放つておけないのよね。日南子つてさ、お姉ちゃん子で母性本能くすぐるタイプだから」

「母性本能つて……。それつて彼氏に言つ葉だよ」日南子が口をとがらせる。

2人はやつと、新幹線乗り場のホームに到着した。思わずふう、とため息をついてしまう日南子。そんな日南子に園子は、

「そうそう、荷物持つてくれてありがと」

と言つた。

「持つてもらつた手前、言い辛いんだけどね。実は荷物は全部、も

う実家の方に送つてしまつてゐるの」

「じゃあ、この中身は何?」

日南子が聞くと、園子はこつこつと笑つ。

「開けていいよ」

日南子は園子に言われるがまま、カバンを開けた。カバンの中には、カバンが入つていた。綺麗なビーズと刺繡をあしらつた、手作りのカバンだつた。

「前に日南子が気に入つていたのを思い出してね。良かつたら、貰つてくれる?」

日南子は、カバンの中からカバンを取り出した。

「ありがとう」

ちょうどそこに新幹線が入つて來た。ドアが開き、園子が車両に乗り込んだ。

「お別れといつても、全然会えなくなるわけじゃないよ」と園子が言つた。

発車のベルが鳴り出した。2人を隔てるによつて、ドアが閉まる。そして新幹線が動き出した。窓から園子が手を振つた。日南子も手を振り返す。

やがて新幹線は速度をあげていき、そしてホームを去つていつた。1人取り残された日南子。ふと寂しさが残る。手元に残つたカバンを見ているうちに、急に悲しさがこみ上げてきた。

園子はまた会えると言つたが、もう、会いたい時に会えるわけじゃないのだ。同業者の友達が去つていくのは、悲しかつた。戦友を失つた悲しみと言つた方がいいかもしれない。

家に帰ろう。

悲しみに浸つてばかりはいられない。

日南子は、園子から貰つたカバンを抱え直した。そして新幹線のホームを後にした。

日南子はいま、姉の路子とともにマンションの一室で2人暮らしをしている。ひとりの2レバは、姉妹で住むには贅沢すぎる広さだった。これも姉路子が家賃の3分の2を負担していたおかげだつた。しかしその生活に、突然の変化が訪れたこととなつた。

近々、姉の路子が結婚をすることになった。

路子は日南子に何度も左手の薬指の指輪を見せびらかしたあとに、いつ言った。

「で、どうするの？　あんたは」

「え？　何？　何が？」

日南子が聞き返すと、路子は言つた。

「いつまでもこのままつて訳には行かないでしょ。私が引越ししたら、当然日南子も、ここから出ていくことになるのよ」

そうなのだ。路子の結婚とともに、日南子と路子の同居生活は終わる。そうなれば、日南子は引越しをせざるを得ない状況に追い込まれてしまうのだ。

それにしても……。

自分の部屋の真ん中について、部屋を360度見回した日南子は、ふう、とため息をついた。それにしても、この荷物の量、どうすればいいんだろう？　日南子の仕事部屋は、机の上に画材が散乱し、壁には日南子が仕事で描いたイラストが貼り付けてある。資料用に買った雑誌類、イラスト集や写真集が積まれるなどした、独特雑多な空間がそこにはあった。部屋は物で溢れてどこから手をつけていいものか分からぬ。

いつかはやろうと思つていたのだ。毎年大晦日には、大掃除をやる計画はした。だが気が付くと先送りしていく、「まあいいや」と終わってしまった。

日南子は、ちょっとやそつと片付けそうにない部屋に再びため息を一つつき、それでも表面ぐらいは何とかしようと思つて、身近なところから掃除をはじめた。とりあえず、机に散らばったマーカーの片付けからだ。

やがて、田の前に転がっていたマンガ本に手がのびた。ページをぺらぺらめくつているうちに、その世界に引きずり込まれていった。突然の電話に、驚いた田南子。ハッと我に返つて電話の取扱器をとつた。

「もしもし」と田南子。

すると電話の向こうで、

「もしもし、私白木和夏子です。覚えてる?」

電話の向こうから、懐かしい声が響いてくる。田南子は思わず声をあげた。

「和夏子? ええっ、懐かしいね!...」

「久しぶりに友達の家に電話をかけるのって、なんだか勇気がいるね」

和夏子は照れながら言った。

「そんなこと、気にしなくていいのに」

田南子が笑つた。

「最近多いんだ。友達からの電話が。田舎に帰るとか、結婚するとか」

すると和夏子は、さりげなくこいつ言った。

「実は私もなの。今度結婚するの」

田南子は驚いて言つた。

「和夏子が? おめでとう! いつ? 式はあげるの?」

和夏子は、田南子にも披露宴には来て欲しいと告げた。そんな会話をしているうちに、話は最近会つた友達のことになつていつた。

「人生の岐路に立つているのは、私だけじゃないんだよ」と和夏子が言つた。

「スガツチは覚えてる?」

「菅山君のこと?」

「来月ドバイに転勤だつて」

「ドバイって? 日本から遠そつな所だね」

「ミノちゃんとも連絡とつたよ。同棲中の彼と別れたんだつて。ミ

ノちゃん落ち込んじゃつてて。今度、日南子も会つてみない？

「いいね、ぜひ誘つてよ」

とりとめもなく懐かしい友人達の話をする2人。いつしか2時間、3時間と、時の経つのも忘れていた。

「でもさ、何故か突然古い友達と、たて続けに会つたりする時期つてあるよね」

ふいに和夏子が言った。

日南子自身も、最近同じことを感じていた。

とても不思議なことだが、人会う時期はまるでバイオリズムのように波があつて、突然ぱつたりと誰からも連絡が来なくなるということもあれば、一度に様々な人……特にずっとごぶさたしていた人から連絡があつたりするという時期がある。

「今は、交際運が上がつてる時期なのかな」

と日南子が言うと、

「人生の転機つてヤツじゃない？」

和夏子がサラリと言つ。

「人生の節目なのがもしけないよ。そういう時期つて、つき合う人が急に変わつたりするんだつて。日南子は今が人生の転機なんだよ」「そう言えば、私今度引越しするかもしけないんだ」日南子が言った。

「へえ、そなんだ。また、お姉さんと一緒に住むの？」

「お姉ちゃん、結婚するんだ。だから今度は1人暮らしをするかもしない」

すると和夏子が言った。

「じゃあ、ウチの近くに引越ししてこない？ また一緒に遊ぼうよ」

日南子は、ちょっと嬉しくなつた。人生の転機か。付き合つている人が変わり、引越しして住む場所も変わる。何もかもが新しい生活に向かっていく。和夏子からの電話、これも何かのサインだろうか？ と日南子は思った。

「とりあえず、今はヒマなの？」

と和夏子が聞いた。

「うん、まあね」と日南子。

「これから会わない?」

和夏子と会うのは何年ぶりだろうか、と日南子は思いながら、和夏子と約束をとりつけた。駅で会おうと言つて電話をきり、日南子はつきうきと出かける支度を始めた。

和夏子と日南子は喫茶店で会つて、1、2時間ほど話をした。久しぶりの和夏子は昔と印象が変わっていた。綺麗に痩せて、スタイルも抜群に良くなり、化粧の仕方も上達し、一段と洗練された大人の女性となっていた。

「今度、私もメイクの仕方とか、いろいろ教えて貰おうかな」と日南子が言つと、和夏子は、「喜んで」と言つて笑つた。

話はとりとめもなく広がつた。久々に楽しい時を過ごした日南子は、和夏子の再会を心から喜んだ。

店を出て和夏子と別れた日南子は、何げなく不動産屋の前を歩いていた。店を通り過ぎようとして、ああ、そうだ、新居を探さなきやならないんだなと思つて立ち止まつた。

店の入口には、マンションやアパート、貸家等の、様々な物件のチラシが並び、日南子はそれらを食い入るように見つめた。

間取りの図面に自分を投影させて、近い未来を一瞬想像してみる日南子。そのとき不動産屋のドアが開き、1人の女性が外へ飛び出してきた。半袖の黒いVネックのワンピースを着た、背の高い細身の女性だ。きつね顔の美人な彼女は、日南子を見ていきなり声をかけてきた。

「日南子? 日南子じゃない?」

戸惑う日南子。最初は誰だか分からなかつたが、記憶を辿るつちに、彼女の顔と名前が閃いた。

今西花音。

過去の苦い記憶が、一瞬で蘇る。

「やつぱつ田南子なのね。久しぶり、元気にしてた?」

田南子は、何と言つていいのか分からず、黙り込んでしまった。結局どうしていいのか分からず、花音から背を向けて歩き出した。すると花音が追いかけてきて言つた。

「田南子? ! 別に逃げなくたつていいでしょ」

花音は田南子の横に並んで話しかけてくる。田南子は花音を無視して歩いていく。

「ねえ、久しぶりに会つたんだから、喫茶店で話でもしない?」

田南子は、花音を振り向きもせずに言つた。

「私、お茶飲んで来たばかりなの」

「じゃあさ、その辺歩きながらでいいわよ。ちよつと話しあつよ」

花音は、しつこく追いかけてきた。田南子が立ち止まつて言つた。

「花音、変わつてないね」

花音も立ち止まる。

「逃げるなつて言われても、逃げたくなるわよ。琉一のこと、あんなことになつて!」

田南子は、言い切つたあとでしまつた、と思ひ、口をつぐんだ。そして、どうしていいのか分からずに下を向き、再び早足で歩き出した。花音はそのまま呆然として立ち止まつていたが、再び田南子を追いかけてくる。

「悪かつたと思つて。あの時、琉一の誘いに乗らなければ、田南子を傷つけずに済んだのに。……友達の彼氏をとつてしまつなんて、사이트よね」と花音。

「今さら言つても遅いよ。私は彼氏と親友をいつぺんに失つたのよ」と田南子。

花音は黙つてしまつた。2人はしばらく何も話さず、黙り込んだまま並んで歩いていた。

田南子は花音の目を見ることが出来なかつた。なんでだろ?私が悪いんじゃないのに。どうして私が後ろめたい気分にならなきやいけないんだろう? 田南子はそう思つた。

「そついえは田南子。そつき不動産屋の前で、物件を探してたね」不意に花音が言った。

田南子も言った。

「花音ひかる。引越ししようつと想つていたの？」

「そのことなんだけどね……」花音は言った。

「私、琉二と別れることになるかもしない」

「？！」田南子は、思わず花音を見つめた。

「そう。引越しして、琉二のことは、全て忘れてしまおうかと思つてる」

「どうこうことなの？」

田南子が花音に聞いた。だが、花音はその話題を避けるよつて、話題を切り換えてしまつた。

「そうだ、田南子はお姉さんと住んでいるんじょ」

田南子は、うん、と軽く頷いた。

「姉貴、結婚するんだ」

「で、今の場所、引き払つて引越しするつもつなの？」

花音が少し考え込んでから言った。

「田南子のお姉さんが出ていつたら、私がそこに面候をせて貰おつかな」

突然の花音の申し出に驚く田南子。

「冗談でしょ」

「そもそもないわ」と花音。

「ねえ、今から田南子の部屋を見に行つてもいい？」と花音が言った。

そんな花音の言葉を、田南子が跳ね返す。

「何で花音に部屋を見せなきやいけないのよ」

「まだ怒つてるの？」と花音。

「あたりまえでしょ」田南子が言った。

花音はいつたい、どうこうつもりなんだつて、無言で歩く田南子を、なおも追い続ける花音。花音は、じつまでも田南子を追い続けて歩いていった。

結局花音は、田南子のマンションまでついてしまった。田南子は半ば諦めて、花音の為にドアを開ける。入るなり花音は叫んだ。

「いいといいだね」

2人は部屋の中へ入つていった。

この部屋は、8階建ての7階にあって、リビングの口当たちは良く、窓からは町が一望できた。ちょうど丘の上に立つてるので、眺めも最高にいいのだ。

「ここなら私も、住んでもいいと想つわ」

花音がソファに腰掛けて言った。

そして花音は、こんなことを語りだした。

「親友って何だと思う？一緒にいて楽しくて、何でも話せて、信じることが出来て、何も気兼ねしなくていい人のことよ」

「そんな友達、そつはいないわよ」と田南子。

「そう、そんな友達に出会うことなんて、そつそうないわ。だからよ。失つて改めて気付いたの。ねえ、田南子、もう一度友達をやり直さない？」

花音にそんなことを言われて、とまどひ田南子。だが、花音はさらに続けた。

「一緒に住むつてことは、友達をやり直す方法の一つでしかないの」田南子は、花音を見ていた。琉一のことがなれば、今も友達だつたかもしれない花音。一緒にいて楽しくて、何でも話せて、信じることが出来て、何も気兼ねする必要のなかつた友達。田南子は、まだ琉一と知りあつ前の花音を思い出していた。

「……そうだね、花音。私もそう思つていた。だからこそ、琉一を花音にとられた時、私はあんなにも泣いたんだ……。

「まだ傷は癒えてないんだから。ムリだよ。花音と一緒に住むなん

て」

田南子は下を向いた。

すると花音はソファから立ち上がり、

「そうだ、日南子の部屋も見せてよ」

日南子は、慌てて花音を制した。

「ダメだよ。まだ片付けの最中なのに…」

ここかな、と言しながら、花音が日南子の部屋の扉を開けた。日南子の部屋を見るなり「よくこんな部屋に住んでいられるわね！」と花音は言った。花音はおもむろに近くにあつたゴミ袋を手にとり、手早い動作で掃除をはじめた。日南子は驚く。花音が言った。

「いろいろのからどんどん捨ていかな」と、このままじゃ床が抜けてしまうわ」

「もう、勝手に人の部屋に入ってきて、何を言いく出すのよ」と日南子。

すると花音が反論する。

「日南子。私は同居人候補よ。その私が、口出しするのはまつとうな権利だわ」

花音は日南子の前で、クローゼットを開けた。花音のこきなりな行動に、日南子は目を白黒させて、

「待つて…！ ちょっと待つてよ…！」と言った。

「クローゼットも、しつりじゃない。これじゃ、片付ける隙間もないわ」と花音は言つ。

そのクローゼットの奥に、花音はふと目を止める。ぎったりのスベースの中に、とても大事そうにしまわれている箱を見つけた。箱は綺麗な菓子箱で、赤いリボンがかけられており、ていねいに『封印』と書かれた紙が貼られていた。

「何これ？」

「わつ、それはダメ！」

日南子は花音の手から、その箱を奪い返そうとした。が、花音はさつとそれを交わした。

「なんだか分かりやすいなあ。開けてくれ、と言わんばかりじゃない

花音は興味津々といった様子で封印を破り、その箱を開けた。

箱の中にはアルバムやペンダントや、小物や小さなクマのぬいぐルミが入っていた。アルバムを開くと、そこには琉一の写真や、日南子とのーショットの写真などが貼られている。

「処分しようと思ったのよ。だけ……」

日南子は言った。

「思い出はやう簡単にには捨てられない、か」と花音。

「私もそう。ずっと過去を引きずっているもの。でもこのまんまじや、いつまでたっても前向きになれないよ」

花音がアルバムを閉じた。

「そうだ、リセットしよう

「リセット?」日南子が聞き返した。

「今までの関係をきれいに清算して、そして引越しして、新しい生活をはじめるの。今までの生活をきれいに掃除したら、いろいろなことが前向きになっていくかもしれない」

花音は言った。

「さあ、掃除掃除。まずは部屋を綺麗にして、全てはそれから再び花音はゴミ袋を持ち、片付けを始めた。

チャイムが鳴り、玄関のドアを開けた日南子。そこには掃除用品などを買い込み、手荷物で一杯の花音がいた。

「また来た」日南子は露骨にイヤな顔をした。

「何度も同じなんだから。私はまだ花音のことを許したわけじゃないんだからね」

花音は「けよ」と買い物に出かけてくる」と書いて出かけていく、そしてしばらくしてから戻ってきたのだ。花音の買い物袋の中身から、本気の程がうかがえる。

花音は、部屋に上がり込んで、日南子の部屋の片付けをはじめた。「だめだよ、日南子。お菓子を食べたら、空き箱はすぐにゴミ箱に

捨てないと」と言った。

「余計なお世話よ。私の部屋なんだから、好きに使っていいでしょ」と日南子。

しかし、花音は日南子の言葉など耳に入っていないといった様子だ。

さてと。花音が手を打った。そして、部屋を見回していった。「ねうだ。片付けの基本は『こいぬもの』と『こらないもの』を分けていくことよ」

花音は部屋にある、小物や本や雑誌類を手にひとつずつ、一つ一つ日南子に聞いていった。

「これはこるもの？ いらないもの？」

「これは『いらないもの』かな」

思わず花音のペースに引きずり込まれる日南子。ついについ受け答えをしてしまつ。

「これは？ いるもの？」

「こりない」

「じゃあこれは？」

「これも……『いらない』かな」

そんなことをしているうちに、やがて部屋の中央には、『いらないもの』の山が出来た。

「こうして見てみると、結構『いらないもの』が多かつたんだな」と日南子は思った。

「気がつかなかつた。いつの間にか私は『いらないもの』に囲まれて生活してたんだ」

そこへ日南子の姉の路子がやつて來た。いつの間にか、帰つてきていたのだ。

「あら、花音ちゃん、久しぶり。何年ぶりかしら」路子は、日南子の部屋を覗いて言った。

「ああ、覚えていてくれたんですね」と花音。

「道でばったり会つて日南子と話をしたら、盛り上がりもつて

「盛り上がりなんかいないでしょ」と日南子が反論する。

「お姉ちゃん、顔を出して来ないで」

日南子は路子を部屋から閉め出して言った。

「ありがと、花音ちゃん。妹の日南子をよろしく頼むわね」とこっこ笑いながら路子へ、日南子は思わず、

「勝手によろしく頼まないでよ」と言つた。

そしてやれやれと、部屋の中に座り込んだ。

「まったく、お姉ちゃんもお姉ちゃんなら、花音も花音だわ。なんでもみんな勝手なことばかり言つのかしら?」

「でも、もうすぐそのお姉さんも、日南子と離れてしまつて、いろんなことを言わなくなつてしまつたよ」

ふい花音がさつ言つたので、日南子は思わず口を開けてしまつた。

友達が次々と田舎に帰つたり、結婚したりしていき、姉路子との同居生活も終わつてしまつ。いま日南子は、寂しい最中だった。本当のことと言うと、花音に「一緒に住もう」と言われた時、少しだけ嬉しかつたのだ。

だが、問題は、相手が花音だとこつことだ。自分の彼をとつてしまつた友達を、まだ、心から許せる気分にはなれなかつた。

そのとき花音がふと、床に積み上げられた『いらないもの』を見ながら言つた。

「『いらないもの』って、いつの間にかたまつていいんだよね」「そういえば、そうだね」日南子も頷いた。

日常の積み重ねが、知らない間にたまつていて、それが押し入れなどを占拠する。今はそれがたまりにたまつて、身動きがとれない状態なのかもしれない、日南子は思つた。

「ものを、どんどん整理していかなきゃいけないね」と日南子。

突然花音が言つた。

「そうだ、フリーマーケットで出してもいいよつか」

「フリーマーケット?」と日南子。

「やうそう。私も引越しするし、売れそつなものがあつたら持つていくわ」と花音。

「やうよね。どこかで処分しなきやいけないのよね」

日南子が『いらないもの』の山を見ながら言つと、花音が、「じゃあ、やつそく参加の申し込みをしておくよ」と言つて笑つた。

ある晴れた日曜日。都内の大きな公園で、フリーマーケットが開催されていた。花音と日南子は、2人で会場を訪れていた。上着や靴、カバン、アクセサリー、ショールや食器、エンピツ立て、小物入れ……。日南子と花音がそれに処分しようとしていた品々が、敷物の上に並べられている。

周囲の別の店を見に行つていた花音が自分たちの売り場に戻つてから言つた。

「こここの品物は、私達のカラーが出てるね」

そこへ母親とともに会場を回つていた12、3オグらいの女の子が来て、日南子たちの店の前で足を止めた。女の子は白いイルカのペン立てを見て、それを欲しそうに眺めていた。

「お母さん、これ買つていい?」

「いいけど、もう少し別のところも回つてからにしたら?」母親は言つた。

女の子は言つた。

「なくなつちやうかもしれないよ」

「じゃあ、しばらくの間、取り置きしておきしまじょうか?」花音が口を出した。

女の子は、「ありがと」言つて、喜んだ。そして女の子は、母親とともにフリーマーケットの雑踏に消えていった。

「良かつたね、思い出を買つてくれそうな人がいて」花音が言つた。日南子はちょっと名残惜しそうに、ペン立てを見ていた。本当は売りたくなかつたのだ。だが、ものを減らすと決めた以上、好きな品物でも、売らざるを得ないと思つていてる。

「やつぱり自分が好きだったものが売られていくのは、悲しいな」

日南子がつぶやくと、花音が言った。

「思い出を、別の思い出に変えればいいのよ」

突然花音が言い出した。

「そうだ、今日の売り上げで新しい家具を買わない?」

日南子は、思わず聞き返す。

「家具?」

「ソファがいいな」と花音。

「今日の売り上げは、ソファを買つ足しにこいつ」

驚いた日南子が言った。

「ちょっと待つてよ、ソファなんか買つてどうするのよ」「決まってるでしょ、リビングに置くのよ。想像してみて。ソファがあると、2人でくつろげていいと思うよ」花音が言った。

日南子が慌てて花音を制する。

「まだ一緒に住むつて決まつたわけじゃないでしょ」

花音は黙つてしまつた。日南子もつられて黙つてしまつ。なんだか居心地が悪くなつてしまつたなど、日南子は少し後悔した。しばらく何も話さないまま、2人は黙つて店番をしていた。

ふいに花音が話し始めた。

「ねえ、そういうえば今思い出したんだけじ、あのピアス、覚えてる?」

「タツノオトシゴのピアス。2人でお揃いで買ったヤツのこと?」

日南子が言った。

それは、まだ琉一と日南子が付き合つ前に、花音と2人でショッピングに行つた時に買ったものだつた。銀色で小さな赤い宝石のついた、ちょっと変わつた形のピアスで、2人同時に気に入つて、お揃いで買つたものだつた。

「私、いつも持ち歩いているんだ」

花音がポーチの中から大事そうに小さな袋を取り出した。そこに

一つのピアスがあつた。

日南子の顔が、思わずほころんだ。

突然、花音がこんなことを言い出した。

「私たちって、本当に不思議ね。2人して友達に彼氏とられちやう

なんて、運命的とか言いようがないよ」

その意味が分からず、日南子は思わず聞き返してしまつ。

「どういうこと?」

「琉一ね、今は私の友達と付き合つてて。私には隠してるけどね」花音は言葉を続けた。

「それで初めて分かつたわ。あの時日南子がどんな気持ちだつたのか。あーあ、なんで琉一は恋人の友達とばかり付き合つんだりう?..」

その時、さきほどの女の子が、母親とともに戻ってきた。

「さつきの……イルカのペン立て、下さい」

女の子に言われ、日南子が品物を手に取る。

「ハイ、これですね」

女の子がお金渡し、うれしそうに品物を受け取つた。母親の後を追いかけて、スキップのように駆けていく女の子の後ろ姿を見て、花音が言つた。

「思い出が、別の思い出になつていいくよ」

花音のもの言いに、日南子はつい笑つてしまつ。それにしても、花音が友達に琉一をとられたという話は本当なのだろうか?

日南子は今までずっと花音を避けていた。だが花音からその話を聞いたとたん、何故か心を開ざしていた氷が溶けていくような気持ちになつた。

友達がみな去つていき、姉が結婚し、部屋を引越していかねばならない。そんな時、花音が近くにいた。今、花音は日南子の寂しい気持ちを和ませてくれている。これはもしかすると花音ともう一度やり直すチャンスかもしれない、日南子は思い始めていた。

フリーマーケットの帰り道に、日南子と花音が歩いていると、商店街の一角にとある不動産屋があつた。花音が足を止めて、店頭に

貼られている物件を見始めた。日南子もつられてそれを見る。花音が言つた。

「新しい場所に引越す方が、気持ちの切り換えにはなるかもね」

花音がマンション情報の1つに目を止めた。

「あ、この物件、何かいい感じだよ」

その物件は、2人暮らしには丁度よい大きさの物件だった。日南子は言つた。

「私、まだ花音と住むつて決めたわけじゃないのよ」

すると花音は言つた。

「ちょっと見るだけだよ。どうせ日南子だって、自分の住むところを探しているんでしょ」

「そうだけど……」

「いいから、見に行つてみよっよ」

花音は強引に日南子の手を引き、不動産屋へと入つていった。

日南子と花音は、不動産屋に連れられて、とあるマンションの一室にやつて来ていた。

不動産屋で、2人は何件かの物件を紹介された。そのうち成り行きで、今日これから実際に部屋を見てみましようということになり、3、4軒の部屋を見て回ることになったのだ。

しかし1軒目、2軒目と回つてみたものの、それらの部屋は花音の気に入つたものではなかつた。

そして3番目に一行が向かつたのが、4階建てのマンション。最上階の角部屋だった。このマンションは4階建てではあるものの、エレベーターがついていた。3人はエレベーターで、目的の場所に向かつた。

入るなり、2人は「わあ」と声を上げた。

その部屋は入口のドアからして風変わりだった。ドアは木製で、四角いタイルが6つついている。それを開けると天井に目が留まる。この部屋はマンションなのに屋根がついており、傾斜した天井には

出窓までついている。

システムキッチンは木製で、カウンター付き。リビングにはなぜか3畳のロフトと、出窓になつてゐる可愛い丸窓がついていた。

「ここいいね！」

花音と田南子は、同時に叫んでしまつた。「屋根裏部屋みたいな感じが、特にいいよ」

田南子が目を輝かせた。するとすかさず、「この物件は、今日出たばかりなんです」と不動産屋が言つた。

「ここは以前、大家さんの娘さんが住んでいたんですが、急に海外に行くことになつたつていうんで、この部屋が空いたんです。掘り出しものだと思いますよ」

「海外つて、留学でもしてゐんですか？」と花音がたずねると、「結婚するつて聞きましたよ」と不動産屋。

「ねえ、ここに引越しれない？」花音が言つ。「ちょっと高めだけど、2人で家賃出すなら、手の届かない額じゃないよ」

そう言われて、田南子の気持ちは大きく揺れ動いた。窓の外には、公園が見えていた。子供たちが楽しそうに遊んでいる姿が見える。

田南子も、ここに住んでみたいという気持ちが強まつてたが、急に現実に立ち返つてしまつ。いろんな迷いが頭をもたげてきた。もし「こと決めたら、花音と一緒に住むことになる。私の気持ちは大丈夫？ 私は花音ともう一度やり直すことが出来るの？」

「花音、ごめん。今すぐは決められないよ」花音は言つた。

「一日考えてみて。とりあえず一日待つから、その間に考えてみてよ」

田南子は、黙つて頷いた。

一日悩むというのは、大変なことだなど日南子は思つた。自分が本当は何に悩んでいるのか、日南子自身良く分からなくなつっていた。そんな時だつた。姉路子の学生時代からの友達が訊ねてきた。彼女は路子が押し入れから見つけた新品同様のコーヒー カップのセットを貰いに来たのだつた。

「ありがとう、本当に貰つていいの？」

路子の友人の萌美は、コーヒー カップのセットの箱を手にして言った。

「どうぞご遠慮なく」と路子が言つた。

「でも、何でこんなもの、持つてたの？」

萌美が訊ねると、日南子がすかさず言つた。

「ビンゴの景品よ」

萌美が笑つた。そういうば……と、路子が手を叩いて言つた。

「こんなものもあるわよ。これもいる？」

路子が押し入れの中に首を突つ込んで探してきたのは、ティーカップのセットだつた。それは、白地に四つ葉のクローバーの模様がついている、シンプルで使いやすそうなティーカップだつた。

「これもビンゴの景品？」と萌美が聞く。

「クリスマスのね」と日南子が笑う。

ところで何でカップばかり貰つていいくの？と日南子が聞くと、

萌美は説明した。萌美は今、喫茶店を経営しているのだといつ。

「カップ集めつていう趣味も兼ねているのよ。その時の気分でいろんなカップでお茶を出すの」萌美がそう言つと、日南子は納得した。「妹さん、たしか日南子ちゃんと言つたわよね。今度うちに遊びにおいでよ。東町の商店街近くでやつてるのよ」

「東町つて言つたら……」日南子が言つた。

そう、花音と見つけたあのマンションは、東町にあるのだ。それを聞いた萌美は言つた。

「そのマンションに引越すつもりなの？」

「まだ分からぬ」と日南子。

「何で？」と路子。

あのマンションはとても気に入っている。しかし、今一歩踏み出せないでいるのだ。花音のこともある。引越しのものに前向きになれないこともある。それとも、これまでの自分が変わっていくことに耐えられないのかもしれない。いろんな変化が恐いのだ。

萌美が言った。

「もし日南子ちゃんが引越すことになつたら、『近所さんね。そしたら、どんどん遊びに来て欲しいわ』

「その時は友達も一緒にいい？」と日南子。

「お姉ちゃんの友達と友達になるなんて、なんだか不思議な縁ね」と日南子。

「でも、こういう関係も、面白いと思つわ」

萌美は笑つた。そして萌美はカップを手に取つて言った。

「カップの底には、何を置くと思つ？』

「受け皿？」と日南子が答える。

萌美は言った。

「カップと皿はセットでなくちゃ。新しいカップを用意したら、同じ柄の受け皿も用意しないとね」

その話を聞いて、日南子はふと和夏子と話をしたときのことと思いついた。

今は転機。そうだ。友達が去り、姉が結婚し、そして懐かしい友達に逢い、そして？

引越しをして、新しいところへ行く。

そして、新しい生活が始まる。

日南子の周囲で、いろんなことが動き出している。あとは、日南子の決断次第なのだ。一歩踏み出せば、ものごとは新しい場所へ向かって流れしていくに違いない。

「決めたわ」日南子は言った。

路子と萌美が、驚いて日南子を見る。

「私、新しいところに引越しすることにする」

日南子は、覚悟を決めていた。

新しいマンションへの引越しを決めて以来、日南子の掃除は急ピッチで進んだ。がぜんやる気が出たのだ。あのマンションに住みたいという思いが、日南子の魂に火をつけたのかもしれない。そんな日南子の変貌に、路子も驚いていた。

萌美が帰ったあと、日南子は即座に花音に電話をし、翌日花音がさつそく契約をしに不動産屋に行つたのだ。

これでもう、後には引き返せなくなつたなと日南子は思った。

引越しの日は、着実に近づいていた。

この日は、一足先に路子がマンションを出る日だつた。マンションの下には、引越し用のトラックが停まつてゐる。そして、部屋から、家具などが運び出されていた。

姉路子は、引越しの大半を、引越し業者に頼んでしまつた。だから引越しの最中は、日南子は邪魔にならないように、部屋に籠もつて仕事をしていた。

ああ、今日から私は1人暮らしなんだ、と日南子は思った。姉と2人で暮らして來た広い空間に、1人暮らしそれはいつたいどんな生活なんだろう？と日南子は思った。

やがてトラックに荷物が詰め込まれ、マンションの部屋の半分、つまり路子のいた空間だけが、何もない、殺風景なものになつてしまつた。

部屋に荷物が全てなくなると、路子が日南子のもとにやつて来て言つた。

「私はそろそろ、新居の方へ行くわね」

「うん」日南子が答えた。

「1人で大丈夫？」と路子。

「うん。大丈夫」と日南子。

それ以外に、言いよつがない。姉が部屋を出ていくのを見て、突然寂しさがこみあげる。

路子が玄関を出てから数分後、窓の外を見るとトラックが去つて
いくのが見えた。

姉は、行つてしまつた。

姉がいたはずの部屋の半分は、まるでそこからオーラが消えてしまつたように感じた。

日南子は何もなくなつた姉の部屋の中を歩いた。そして、そこに一枚の写真が落ちているのに気が付いた。

写真は、この部屋に住み始めた頃、姉と2人で行つたディズニーランドでの写真だつた。路子と日南子のツーショットの写真。日南子はその写真を拾い、路子の部屋の窓に立てかけた。

日南子は、1人の寂しさを改めて感じていた。こんなに寂しいのに、1人なのだ。

1人暮らしなんてムリだ。

寂しいのはイヤだ。

……とその時だつた。

突然玄関のチャイムが鳴つた。日南子がドアを開けると、花音が立つていた。

花音は玄関に佇む日南子を見て言つた。

「どうしたの？ 何か元気がないね」

「お姉ちゃんが、今日出でいつたの」

日南子がそう言つと、花音が日南子を慰めるように言つた。

「大丈夫だよ。日南子ももうじき出ていくことになるから。そしたら、新しい気持ちでやつていけるよ」

寂しさに押し潰されそうになつていたとき、花音がやつて來た。花音の姿を見ているうちに、日南子は急に元気を取り戻した気がした。

花音は部屋の中にながつてきた。そして路子の部屋を見て言つた。

「本当に何もなくなつちゃつたんだね」

花音は次に、日南子の部屋を見た。

「日南子の部屋も、随分ものが減つたね」

そのとき花音は、部屋の隅に、あの『思い出の箱』を見つけた。

「『封印の箱』は、まだ捨てられないの？」

田南子もそれに気付き、恥ずかしそうに笑った。

「うん、『封印の箱』に捨てるには、ちょっと勇気がいるなと思つて、その時ふつと、田南子にある疑問が浮かんだ。花音は？ 花音は琉一とどうなつているんだろう？」

「花音は、琉一とちゃんと別れたの？」

花音の声が、だんだん小さくなつていつた。

「実はまだなの。言い出せなくつて」

やつぱり。田南子は思つた。

「それは花音らしくないよ。花音も引越しするなら、リセツトすべきだよ」

田南子はふと、思い出の箱に手を触れた。

「ものが残つていると、嫌でもいつか田につくんだよね。思いは捨てられないけど、ものは残しておいやいけないのかもしない」

花音は黙つて聞いていた。

「突き返しちゃおつか」と田南子。

「えつ？」と花音。

「琉一にか、思い出を全部。今度こそ本当の本当」、リセツトしちゃおつか

すると花音の顔が少し明るくなつた。

「いついくの？」

「今すぐ。思いついたら即行動よ」

花音が頷いた。田南子は『思い出の箱』を紙袋につめる。花音がクスッと笑う。

「『思い出』を返しに行くなんて、いい思い出になりそうね」それを聞いて、田南子も笑つた。

花音と田南子は、電車を乗り継いで、隣町までやつて來た。この町には花音が今住んでいるアパートと、琉一のアパートがあつた。

花音は、独り言のようにつぶやいた。

「琉一の近くに住みたくて引越ししてきたけど、わざわざは困らない……」

やがて2人は花音のアパートにやつて來た。花音は自分の部屋をくまなく探し、琉一との思い出をかき集めた。そして思い出の品々を寄せ集めては、それを紙袋一杯に詰め込んだ。日南子は言った。

「これでもう、思い残すことはないわね」

日南子は、念を押した。

「本当にいいの？」

花音は決心を固め、頷いた。

2人はさつそく、琉一のアパートへと向かった。琉一のアパートは、花音の部屋のすぐそばだった。2人は琉一の部屋の前まで行き、玄関のチャイムを鳴らした。すると、中から、Tシャツとスウェットズボン姿の髪を一つに束ねた女性が出てきた。

それが、花音の友達の美貴子だった。

「美貴子！」花音は思わず叫んでしまった。

美貴子は、気まずそうに言い返した。

「な……何？ 何で花音がここにいるのよ？」

花音の後ろから、日南子が現れて言った。

「私、琉一の、花音の前の彼女よ。よろしく」

日南子が握手しようとして手を差し出すと、美貴子は怒つて言った。

「バ……バツカみたい。何で琉一の元彼女と元々彼女が私と仲良くしなきゃならないの？」

玄関が騒々しいので、琉一が気になつたらしく、顔をひょっこり出した。琉一はズボンに上半身は裸、という姿だった。花音と日南子を見て、琉一が睡然とする。

「花音、日南子、何でお前らがいるんだよ？」

花音が言い返した。

「何で琉一のところに、美貴子がいるの？」

琉一は口をつぐんだ。すると、花音がおもろむに紙袋を取りだし、「忘れることにしたのよ、琉一のことよ。これ返すわ」と言った。

「何だよ、これ、琉一がたずねた。

花音は紙袋一杯の思い出を、琉一に突き出して言った。

「私の琉一の思い出は、紙袋一杯分よ」

「貰つたものを、返す必要なんかないだり?」琉一が言った。そこへ日南子も割つて入つてきた。日南子も、思い出の箱を差し出して言った。

「返してもいいでしょ。全部忘れるためよ」琉一は言った。

「お前もかよ。もう3年も前のことだろ? お前と別れて3年だ。

とつぐに忘れてる頃だと思つたぜ」

日南子は言った。

「今度じゃ、きれいに忘れるつもつよ」

花音は、美貴子に言った。

「美貴子、私は今でもあなたを友達と思つてるの。それだけは覚えておいて」

そしていつ付け加えた。

「同じことは、3度あるかもしねないわ」

「そんなこと、あるわけないでしょ」

美貴子は言った。

「もう、友達なんかやめるわ」

「じゃあ、もうお別れね」

花音は琉一と美貴子から背を向け、アパートを離れていく。日南子は花音を追いかけ、アパートを後にした。前を向き、歩いていく花音。花音は自分に言い聞かせるように言った。

「なんだかバカみたいなこと、やつちやたね。でもこれで吹つ切れた気がする」

花音の顔はさつぱりとしていた。

「これでリセット完了」日南子も言った。

2人は顔を見合させて笑つた。

引越しの荷造りは、毎日少しずつ進んだ。

そして日南子は、自分で運べるものは新しいマンションへ運び込み、あと一步で引越しが終わるという所まで作業は進んでいった。

昨日とひつひつ荷物のほとんどを運び出した。

今日は、日南子がこれまで住んでいた部屋を、明け渡す日だった。日南子と花音は、部屋で最後の掃除をしていた。

台所の汚れや風呂場の垢を取り除き、部屋の隅々をきれいにして、埃を払う。花音がその作業を手伝いながら、ひつひつ言つた。

「よくここまで頑張ったね」

そして花音は、デジカメをとりだし言つた。

「記念にこの部屋の写真を撮つていいく？」

日南子は言つた。

「でも、何もない部屋だよ。ここはもう、私の色がなによつての」

日南子は不思議に思つた。

なぜだらう？ もうこの部屋には、未練がなかつた。きれいに何も無くなつた部屋は、きっと新しい誰かの部屋になるはずだ。だが、もしもう一度ここに住んでいいと言われても、日南子は、もうここには住まないだらうと思つた。

「それはきっと、心がもうここにはなつてのことだよ」花音が言つた。

路子の部屋の入ると、以前窓に立てかけていた一枚の写真が目についた。

デイズニー・ランドで撮つた、姉妹のツーショット写真だ。

「これが、この部屋の最後の思い出ね」

日南子はその写真を大事そうにカバンの中にしまつた。

日南子は思つた。

この部屋を引越ししていくことで、私は新しい生活を始めていくことになる。荷物をたくさん捨て、過去をたくさん捨てた。思い出の

品々を売つたりあげたりした。大掃除もした。でも、思い出は消せない。残つていく思い出はあるんだ……。

日南子はなぜか胸のこみ上げる思いと、楽しい思いがないまぜになつた、複雑な思いに囚われていた。

そう。今は転機だ。過去の日々と新しい日々の、ちょうど中間地点に立つてゐる。

明日からは、新しい日々が始まる。

日南子はやがて、部屋の掃除を終わらせた。そして、部屋全体を見回し、最後のチェックをした。

掃除用具を片付けた花音が、部屋を出ようとすると、日南子は、これまで住んでいた部屋のありのままを田に焼き付け……玄関を出た。これで最後だ。

日南子は、ドアに鍵をかけた。

「行こう」

日南子は、大きく息を吸つた。そして花音とともに、歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2895f/>

明日、私はココにいる

2010年10月8日15時07分発行